

# 話題展開に見られる自己開示

日本語母語話者と韓国人日本語学習者の初対面から

3 回の会話を通して

吳 暎榮

## 要 旨

本研究では、関係形成初期からの過程の変化を捉えるため、初対面の相手との 3 回の会話データを元に韓国人日本語学習者(以下 KJ)と日本語母語話者(以下 J)の①話題導入の提示方②話題の種類及び自己開示の内容③話題ごとの構造の変化を考察した。その結果、KJ は話題導入のために自己開示と質問が多く現れ、J は話題を存続するため自己開示や質問が出現する。話題の種類は、KJ の 1 回目の会話は J の 2 倍ぐらい多く 2 回目から急激に減る。KJ は、1 回目の会話では話題の存続が少ない反面 J は、1 回目の会話から 1 つの話題の存続が長い。KJ、J も 3 回の会話を通し、1 つの話題の存続が長くなった。KJ の話題展開のパターンは多様であり、KJ にだけ現れるパターンがあった。3 回目の会話では KJ も J もパターンが少なくなつて、出現するパターンも共通していることが明らかになった。KJ は、初対面の間から急速に親密になろうとする傾向があり、J は相手と安定的に徐々に進展しようとすることが示唆された。

## キーワード

初対面 自己開示 話題展開 話題導入 韓国人日本語学習者

## 1 研究背景

我々の日常生活では親しい間の人と会話することは多くある。互いの情報を知っているため、話題を選択するのにほとんど難しさが無い。しかしながら、初対面の人との会話は何を話せばいいのか、今後の関係維持に深くかかわる場面であり、相手に失礼にならないよう工夫をする。田所(2013)は、日本語母語話者と非母語話者を対象に質問紙調査を行ったところ、会話中最も難しいと考えたのは話題選択であることを指摘している。話題を選択することは学習者のみならず母語話者にとっても難しい項目と考えられる。初対面を対象にした話題研究は母語話者同士の研究(メイナード 1993、宇佐美・前田 1995、中井 2003a)や文化差(中井 2004、奥山 2005、楊 2007)を持つ人同士の研究など多くなされてきた。特に、日本語学習者は同文化の人と話す時より文化の差による違いや違和感を抱くことがあり、相手にどのような内容を自己開示するか、そして聞くか、会話の進め方による差が指

摘されて来た(熊谷・石井 2008、大谷 2015)。

話題としてどのような内容を出すか、どのような内容で自分の情報を与えるか、話題とその内容は自己開示と密接な関係にある。自己開示の程度の差は、話題の出現傾向にも関連している(中山 2003)ように、会話を進行する中で、互いに自己開示を通して情報を交換してそのまとまりが話題になるためである。話題の研究には話題選択のスキーマ、話題導入、話題の展開、話題終了など様々な観点から研究されてきた。しかし、ある特定の現象に絞られており話題となった内容全体に焦点を当てた研究は少ない。会話を進めていく中でいかに進めていくか、その現象を捉えることも重要だが、内容すなわち話題を取り上げその中での情報交換や自己開示の談話全体を分析する必要があると考えられる。しかしながら、従来の研究は質問紙調査が多く、会話データを元にした研究でも横断的研究が多い。そのため、関係形成初期からの過程の変化をとらえることは困難である。初対面の相互作用はその後の印象にも影響を与える(小川 2000)重要な場面でもあり、そこから関係を構築するに至って会話の全体像をとらえることは有意義があると考えられる。

以上を踏まえて、日本語での会話において話題導入、展開と構造を明らかにすることを目的とする。会話全体を視野に入れ、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の母語場面と日本語母語話者対韓国人日本語学習者の初対面から 3 回までの会話を収集し分析する。具体的には、内容に焦点を当て話題になる導入の仕方と、話題になってからの展開の仕方に注目し、話題の内容と構造の変化を考察する。そのことにより、会話全体の展開の仕方と構造の考察ができると考えられる。本研究でのデータは限られた数ではあるが、質的に分析することで初対面から関係形成の過程の変化を示していきたい。

## 2 先行研究

### 2.1 初対面場面の話題の研究

初対面を対象にした話題の研究には、話題開始部、終結、構造、展開方法などは多くみられるが、焦点が絞られているため全体像が見えにくく、質的に論じられていないのが現状である。その中で、日本語母語話者を対象にした話題の内容に関する研究には、Nakayama(2008)がある。Nakayama(2008)では、日本語母語話者を対象に初対面から 8 回における話題の種類別出現頻度に関する質的分析をしている。その結果、自己の内面に関する話題が出現した箇所において親密さの高まりがみられることが示されている。日韓の対照から話題の開始部と内容に焦点を当てた研究には(奥山 2005、李 2016)が挙げられる。李(2016)は、日韓の話題提示方と導入要素を分析している。質問による話題提示は日本語母語話者の方が多く自己開示による話題提示は韓国語母語話者の方が多いことが明らかになった。しかし、話題の開始部に焦点を当てていて、話題になってからの流れ、質問と自己開示の役割までは見られない。奥山(2005)は、日韓の大学生を対象に話題の導入の仕方を 40 分の会話から 5 分ごとに切って自己開示の量と質問形式に分けて分析している。質問による話題提示は日本語母語話者の方が多く自己開示による話題提示は韓国語母語話者の方

が多く現れる結果で、李(2016)と同様である。しかし、奥山(2005)は、一回のみの結果であるため、時間に沿っての変化は見られたが、会話を重ねることによる変化までは見られていない。そして、自己開示は男女の差が見られ(榎本 1998)、会話調査の対象者が一定してないことから、結果に影響したことも考えられる。

本研究では、上記の内容を踏まえた上で、先行研究からさらに視野を広げ、話題の導入部だけではなく、「話題の種類よりも自己開示のやり方や相手への情報の求め方で違和感や誤解が起こる可能性(熊谷・石井 2008)」もあるため、話題になってからの自己開示と質問も視野に入れ話題の展開と構造も考察する。

## 2.2 話題の展開に関する研究

話題の展開と構造の研究には大きく、話者と聞き手の話者間交替とみなして分析したものと(メイナード 1993、宇佐美・前田 1995、中井 2002、楊虹 2015)、情報提供者と要求者のやり取りから分析したのものがある(河内 2003、中井 2003a、三牧 2013、大谷 2015)。これらの研究は、日本語母語話者の特徴を明らかにしたものと、言語間の対照、母語場話者と非母語話者の接触場面を対象にして研究がなされている。その中で、日本語母語話者を対象にした宇佐美・前田(1995)では、話者と聞き手に分け話題になってからの話題展開パターンを「質問一応答型」と「相互話題導入型」2つに分けた。同じく母語話者を対象に、情報提供者と情報要求者に分けて分析した佐々木(1998)では、質問をする人と応答をする人「インタビュースタイル」と、話題についてお互い意見を述べ合う「話し合いスタイル」2つにまとめている。両研究のパターンの定義は異なるが、日本語母語話者を対象にした研究では、2つのパターンだけが提示されている。一方、言語間の対照と接触場面の話題展開の研究では、(中井 2003b、大谷 2015、楊 2015)が挙げられる。楊(2015)は、日本語母語話者と中国語母語話者を対象に分析している。話題の展開を聞き手、話し手に分けて分析し、役割固定型、協調的役割交替型、役割回帰型、話して役割競合型 4つの展開パターンを見出している。中国語母語話者には、話して役割競合型が多く現れ、初対面の距離の取り方が日本語母語話者とは異なって、相手との距離に配慮するより親しさを強調するストラテジーを使うと指摘している。また、日本語母語話者と非母語話者を対象に接触場面での話題展開パターンを分析した中井(2003b)では、「情報要求一応答」と「情報提供/同意要求一応答/情報要求」を提示している。特に、非母語話者には情報提供だけを多くすることが明らかになった。大谷(2015)は、日本語母語話者と英語母語話者の会話参加者が話題展開にどう貢献するかを実際の会話から分析している。展開パターンには、*interactive*、*duet*、混合(*interactive* と *duet*)、モノログの 4つに分けている。4つのパターンの中から、日本語母語話者はインタビュー式が最も多いと指摘している。

これらの研究から、日本語母語話者の特徴や、文化差による特徴が明らかになったことは高く評価できるが、1回の会話データを分析していることと、全ての研究に現れる相互型には情報提供者つまり自己開示と見られる観点からの研究は管見の限りない。会話を進

行させる中で、話題の維持、遂行するため情報提供や質問、応答は必要不可欠である。よって、展開していくパターンを話者交替や情報の提供、要求者の視点からだけでなく、話題のまとまりになる自己開示の働きからも詳しく見る必要があると考えられる。

### 3 研究方法

#### 3.1 会話データ収集の手順

調査は、2016 年 12 月から 2017 年 1 月に屋内の静かな会話録音室で行った。会話の録音時に ic レコーダー 2 台を用意し録音した。会話開始 15 分後に筆者が会話時間の終了を知らせ、終了とした。

##### 3.1.1 会話協力者属性と調査実施日

会話データは初対面から同じ人と 3 回の会話を収録した。協力者は日本語母語話者 2 名、韓国人日本語学習者 2 名である。具体的に母語場面は、日本語母語話者対日本語母語話者 1 組 3 回、韓国人日本語学習者対韓国人韓国人日本語学習者 1 組 3 回、接触場面は、日本語母語話者対韓国人日本語学習者 2 組合計 6 回である。話題は自由で、韓国人日本語学習者は上級者を対象とした。その理由としては、会話中日本語の誤りで会話の流れに支障を起こさないためである。会話調査を実施した実施日は以下の表 1 に示す。

表 1 会話調査実施日

	会話参加者	1 回目	2 回目	3 回目
韓国語場面	KJ1 と KJ2	12 月 19 日	1 月 20 日	1 月 23 日
日本語場面	J1 と J2	12 月 20 日	1 月 18 日	1 月 23 日
接触場面 1	KJ1 と J1	12 月 19 日	1 月 17 日	1 月 23 日
接触場面 2	KJ2 と J2	12 月 20 日	1 月 18 日	1 月 24 日

### 3.2 分析方法

#### 3.2.1 自己開示の定義

自己開示の定義は研究者によって様々な定義があるが、実際の会話データを元に分析した研究の中で、日本語母語話者と韓国人母語話者を対象にした(全 2010)を参考に以下のよう

「相手に言語を介して、自己の情報を与えること」

自己開示の自己の定義は以下通りである。例文は上記の自己の定義を示すものである。

(1)自分自身に関すること： 私は、〈 〉大学からきました 交換留学生です。

(2)自分と関連しているものと関係すること： 研究室の先輩方々はやさしいです。

(3)所属の一員としての自分のこと：うちの部活は器が大きいので

### 3.2.2 話題の定義

話題は談話における概念である。本研究では、話題の流れと話題に現れる全ての項目を捉えるため(三牧 2013、村上・熊取谷 1995、河内 2009、楊虹 2007)と同じ立場から「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」を話題とする。導入された後に展開されなかった項目は除外した。

### 3.2.3 話題導入の認定

話題の導入には、質問と自己開示による話題提示が多いと指摘されている(中井 2003a、奥山 2005、李 2016)。しかし、奥山(2005)と李(2016)は、日韓を対象に話題開始時の導入だけに焦点を当てているため、話題になってからその後の相互行為による自己開示と質問の役割までは分析できていない。従って、本研究では話題導入と話題になってからの役割まで視野に入れ導入の際と話題になってからの会話中 2 つに分け分析する。会話中の自己開示と質問は話題になってからの役割を分析する。すべての自己開示と質問ではなく、話題になってから 1 つの大きな話題は変わらないまま、その話題を存続させるため情報を増やしていく中で現れた自己開示と質問が会話中の自己開示と質問になる。具体的な例は以下の通りである。例文は本研究のデータから抜粋した。

(1)自己開示、質問であるが会話中の自己開示と質問にならないもの

01：なんか進んでますか？ → 話題導入 質問

02：えっと、いろいろ路頭に迷ってますって感じです。→自己開示

01 行目で話題が開始して次に 02 目で返事として自己開示をしているが、質問に対する答えであり、話題を広げるための自己開示ではないため、会話中の自己開示には含まない事例である。

(2)自己開示、質問が大きい話題から小さい話題に派生していくもの

次の事例は、大きい話題すなわち大話題は、旅行である。そこから、研究という大話題の枠から研究のテーマ、研究の内容など小さい話題、派生話題<sup>1</sup>に分けられていく。

まず、01 行目からヨーロッパの話が始まる。そして、話題は変わらずヨーロッパの旅行

<sup>1</sup> 3.2.4 節、話題の内容分類で詳しく説明する。

したところについて話しあうが、06 行目からヨーロッパのある国の天気について話が出る。ヨーロッパという大きな話からは変わらないが、ヨーロッパの何について話すか話を小さな話題に派生させていく。その例が以下のようになる。

- 01 : < > 以外にはどっか旅行とか? →話題導入質問  
 02 : あ、行きました  
 03 : あ、  
 04 : なんかやっぱ< >からいろんなとこ近いから  
 …中略  
 05 : あははははは、わかります。  
 06 : < >はなんか天気悪くなかったですか? 行っ//たら →会話中質問  
 07 : あ、  
 08 : < >に比べて悪かったです。

### 3.2.4 話題の内容分類

話題は階層性があり、複数の関連する話題がより大きな話題としてのまとまりを形成する(村上・熊取谷 1995、河内 2009)。しかしながら、大きな 1 つの話題から次の話題に移る前、次の話題とは関連していないが、大きな話題と関連する内容が 1 つの話題として形成される場合もある。そこで、派生された話題、つまり 1 つの話題が長くなることを考慮して分析するため 1 つの会話を大きい談話とみなして、その中での話題と話題に関連して派生したもの、そしてその詳細な内容である小話題 3 分類して分析した。つまり、話題の内容だけではなく、1 つの話題から派生され関連して次々と続く様子を見るため、大話題と関連した派生話題と派生話題を構成している小話題に分け分類した。最小の話題「小話題」の連鎖が話題のまとまりをなして、そのまとまりが「大話題」である(三牧 2003)。本研究では、1 つの話題が長く存続されている場合、派生話題の連鎖のまとまりが大話題になる。以下の表 2 は大話題と派生話題、小話題の例を示す。

表 2 話題の分類

大話題		派生話題	小話題
1	日本の学校生活		暖房の時間 暖房の利用時期
2	韓国の学校生活	レポート	読まないといけない本の量
		レジユメの書き方	真似したいレジユメ
		本	KJ1 の図書館の本使い方

		KJ2 の図書館の使い方
	製本	韓国の製法仕方
	プリント	プリントの管理法

表 2 には、2 つの大きな話題がある。大話題は日本語の学校生活と韓国の学校生活になる。日本の学校生活については、暖房の話が出てきて互いに学校の暖房の話をする。大話題からどのような内容になったか小話題、そして大話題から関連した話題たちが派生話題になる。そして、2 つ目の大話題は韓国の学校生活で、韓国の学校生活でのレポート、レジュメの書き方、本、製本、プリントについて話されている。学校の生活と関連した内容が派生話題になり、次々と韓国の学校の生活に関連する話が出て大話題の存続が長くなる。

このように、大話題からの派生話題を見ることで、一つの話題が長くなる様子を見ることが出来る。

### 3.2.5 話題の構造パターンの定義

本研究でのパターンは、大話題から次の大話題までのやり取りを示す。しかし、大話題が派生話題で存続する場合、派生話題になった話題を 1 つの話題とみなし分析をした。以下の会話は、発話のコーディングの例になる。相槌、応答の発話は含まない。

- |                             |            |
|-----------------------------|------------|
| 01 : 温泉とかには入らず?             | →質問 (話題導入) |
| 02 : おっさん過ぎて、結局行く気なかったんですけど | →自己開示      |
| 03 : はい                     |            |
| 04 : 寒すぎて                   | →自己開示      |
| 05 : はい                     |            |
| 06 : 体固まっちゃって               | →自己開示      |
| 07 : いいですね。で、鬼怒川に?          | →質問        |
| 08 : 鬼怒川に行きました。             | →自己開示      |

## 4 結果

4 節では、話題導入、話題の自己開示の内容、話題の展開のパターンに分けて結果を示していく。

### 4.1 話題の導入

話題導入を自己開示と質問の 2 つに分けた結果、母語場面は表 3 と 4、接触場面は表 5、6 になる。まず、KJ の母語場面の結果を見えると、話題導入の質問と、派生話題の質問が話題導入の自己開示と、派生話題の自己開示より多く現れている。つまり、質問より自己開示が多く現れた(奥山 2005、李 2016)と同様の結果であった。話題導入質問の場合回数を

重ねることに徐々に少なくなり、派生話題の質問は 2 回目の会話時に増える結果である。次に J の結果は、自己開示と質問が話題を導入する時より、話題になってから 1 つの話題を派生させる時に多く現れた。特に、自己開示は話題導入の際より話題を派生する時に多く現れる結果であった。会話の回数を重ねることに話題を導入する時の質問は徐々に減っていき、KJ と同じである。以下、KJ の母語場面の結果と J の母語場面の結果である。

表 3 KJ の母語場面における自己開示と質問

KJ1、KJ2	1 回	2 回	3 回	合計	
話題導入自己開示	3	0	4	7	26
話題導入質問	10	8	1	19	
派生話題自己開示	3	3	3	9	22
派生話題質問	2	7	4	13	

表 4 J の母語場面における自己開示と質問

J1、J2	1 回	2 回	3 回	合計	
話題導入自己開示	1	0	2	3	11
話題導入質問	4	3	1	8	
派生話題自己開示	4	5	4	13	24
派生話題質問	6	2	3	11	

次に、表 5 と表 6 は KJ と J の接触場面の結果である。接触場面では、話題導入の自己開示、質問の合計と派生話題自己開示、質問の合計に差が見られなかった。接触場面では、会話の回数を重ねることで 1 回目の会話とは変わり減った項目が両グループともに派生話題質問の項目であった。そして、会話の回数を重ねていくことで導入や派生の仕方が変化し J の母語場面のように出現する数値の差が少なくなっていくことが分かる。以下、2 つのグループの結果を示した表である。

表 5 接触場面 1 における自己開示と質問

KJ1、J1	1 回	2 回	3 回	合計	
話題導入自己開示	0	3	4	7	21
話題導入質問	7	3	4	14	
派生話題自己開示	2	4	4	10	23
派生話題質問	6	5	2	13	

表 6 接触場面 2 における自己開示と質問

KJ2、J2	1回	2回	3回	合計	
話題導入自己開示	2	3	2	7	19
話題導入質問	4	5	3	12	
派生話題自己開示	0	3	3	6	21
派生話題質問	8	3	4	15	

#### 4.2 話題の内容と変化

4.2 節では、話題の内容と話題に現れる自己開示の変化を考察する。表 7 と 8 は KJ と J の 3 回を通して現れた話題である。表 7 は KJ と J それぞれの母語場面の結果で、表 8 は、接触場面の結果になる。

表 7 KJ と J の母語場面での話題

	KJ	J
1回	自己紹介、共通友人、*指導教員 <sup>2</sup> 、論文、大学、修士論文、留学、出身学校、研究テーマ、年齢、研究室、交換留学	自己紹介、指導教員、授業、言語、留学、論文
2回	日常、旅行、受験、論文、授業、研究室、入学、修士論文	授業、共通友人、ゼミ
3回	天気、日本の学校生活、韓国の学校生活、研究、携帯	旅行、学会、授業

表 8 KJ と J の接触場面での話題

	KJ1、J1	KJ2、J2
1回	自己紹介、共通友人、研究、留学先学校、ヨーロッパ、今後の予定、映画	自己紹介、交換留学、身分、サークル、研究、論文
2回	苗字、地元、帰国、交換留学、出身、方言	帰省、北海道、そば、春休み、研究、計画、授業
3回	公演、実験、発音、ゲーム、日本語勉強、Kpop、ドラマ、ゼミ	天気、週末、公演、サークル、大学

まず、KJ の話題は 1 回目 14 個、そして 1 つの大話題と関連して派生話題になった話題は、14 項目の話題の中、2 回 1 つの大話題が複数の派生話題で構成され存続していた。2 回目の会話からは、8 個の大きな大話題から 4 つの話題「受験、論文、授業、研究室」が

<sup>2</sup> 1 回の会話の中で 2 回出現した話題

長く存続されている。最後 3 回目の会話からは、話題が合計 5 項目と減っていた。その中、韓国の学校生活が最も長く続き大きな話題から関連した話を派生し存続している。次に、J の 1 回目の会話では、大話題が 6 項目出現し、3 項目目の授業と 5 項目目の論文の大話題が長く存続している。2 回目の会話では、大話題が 3 項目あり、3 項目目のゼミの話題が長く存続している。3 回目の会話では、2 回目と同じく大話題が 1 回目より減り、合計 3 項目出現し、1 項目目から大話題が長くなっている。KJ、J 共に共通に現れた話題は、自己紹介、指導教員、研究、留学、授業、論文である。そして、KJ は日常的な話や生活に関する話が 2 回目から現れ、日常の生活、旅行の話、休日の過ごし方など個人的プライバシーに関わる内容が多く現れている。3 回の会話を通して KJ も J も話題の数が少なくなり、特に J は 1 回目の会話から 1 つの話題を長く存続させていることが分かった。

次に、KJ と J の接触場面では、会話の回数を重ねることで話題の数が減る傾向は見られなかった。そして、母語場面と同じく共通話題として指導教員以外自己紹介、研究、留学、授業、論文が出現している。話題の種類は、母語場面に現れない話題「苗字、地元、帰国、苗字、地元、帰国、出身、方言、公演、実験、発音、ゲーム、日本語勉強、Kpop、ドラマ、身分、サークル、帰省、北海道、そば、春休み、天気、週末、公演」など多様な話題が 2 つのグループどちらにも出現している。KJ1 と J1 のグループからは、1 回目の会話で 7 個の大話題から「研究、ヨーロッパ」2 項目の話題が長く存続し、2 回目は 6 項目の大話題から「帰国、交換留学生、出身、方言」4 項目が長く存続している。3 回目の会話からは、8 項目の大話題から「実験、発音、日本語の勉強」と 3 つの項目が大話題から派生され長く続いている。次に、KJ2 と J2 の 1 回目の会話は、6 つの大話題から 3 つの項目「サークル、研究、論文」が派生され存続し、2 回目は 7 つの大話題が出現し、その中で 3 項目「帰省、春休み、研究」の大話題が長く存続された。最後に 3 回目の会話では、大話題が 6 項目その中「公園、サークル、大学」の 3 項目が長く存続する結果であった。

### 4.3 談話の変化と話題ごとに区切った構造の変化

4.2 節では、話題の内容とその変化を示した。本節では、実際の話がどのように展開して構造をなしているか分析する。そのため、談話全体を分析対象として、話題ごとの構造の変化、その展開のパターンは会話の回数を重ねることでどのように変わっていくのを見る。本研究では、どのように話題になって会話を展開させていくか情報の「要求」と「提供」、つまり質問と自己開示の観点から話題が展開していく変化を分析する。話題導入を「質問」か「自己開示」かで始め、その話題がどのように展開され、話題を存続しているか、質問と自己開示の発話の相互行為から構造を見る。

#### 4.3.1 話題展開のパターン

会話参加者の話題への関与方法には大きく 5 つのパターンが見られた。5 つのパターンの中から、2 つのパターンは主に現れた 3 つのパターンが混合されたパターンである。こ

れら 5 つのパターンを参加者の相互行為のあり方に基づいて 5 つに分類することができた。以下にそれぞれのパターンの会話を示す。

(1) 自己開示一方型

- 01 J1 : 研究テーマは何ですか? →質問 (話題導入)  
02 KJ1 : 研究テーマ  
03 J1 : 私日本語教育と音声 →自己開示  
04 KJ1 : あ、日本語教育  
05 J1 ; 音声学をやってて →自己開示  
06 KJ1 : 音声学  
07 J1 : そうですね。なんか< >に留学してたことがあって →自己開示  
08 KJ1 : うんうん  
09 J1 : で、それで研究テーマが< >人の話す日本語の音声研究してて→自己開示

質問から話題が導入され、J1 がその応答として自己開示を続けて連鎖し、KJ1 は相槌をしつつ相手の話を聞いている。このように、片方の話者が自分の情報を語っていくパターンである。

(2) 質問一方型

- 01 J2 : お正月はどうしたんですか? →質問 (話題導入)  
02 KJ2 : ま、< >でずっといて →自己開示  
03 J2 : < >で  
04 KJ2 : 韓国は旧正月/がメインなんで →自己開示  
05 J2 : あ、  
06 KJ2 : あんまり  
07 J2 : あ、じゃあ別にお祝いしなかったですか? →質問  
08 KJ2 : そうですね。しなかったです。 →自己開示

質問一方型形式は、片方の話者が相手話者に質問をし続け、相手話者はそれに対する応答として自己開示をするパターンである。

(3) 自己開示双方型

- 01 J1 : < >先生の来てましたね。→自己開示 (話題導入)  
02 KJ1 : あ、はいなんか出会いの日本語教育の現状について関心があって  
→自己開示  
03 J1 : うんうん

- 04 KJ1 : 聞きました。
- 05 J1 :面白かったですね。 →自己開示
- 06 KJ1:面白かったです。 →自己開示
- 07 J1 :うんうん。結構興味深いと思いました。 →自己開示
- 08 KJ1 :で、なんか話し方うまいなって思って →自己開示
- 09 J1 :あ、分かる。

自己開示双方型は、互いに自己開示を交互にし続け話題を存続させている例である。(4)と(5)は、(4)混合型I(質問一方型と自己開示一方型)、(5)混合型II(自己開示一方型と自己開示一方型)になる。(4)混合型Iは、片方の話者が質問をし続け、相手は自己開示で応答をし、話題が広がり自己開示をし続けていた話者が途中から自己開示を一方的にし、語っていくパターンである。そして、(5)混合型IIは、片方の話者が自己開示で話を語っていき、自己開示一方型になって終わると、もう片方の話者も自己開示一方型で語るパターンである。

#### 4.3.2 展開パターンの結果

次に話題の展開のパターンが各場面で出現した回数を表 9 と 10 に示した。表 9 は、KJ1 と KJ2 の母語場面と J1 と J2 の母語場面の結果であり、表 10 は、KJ1 と J1 の接触場面と KJ2 と J2 の接触場面の結果である。％は、パターンの出現頻度を 100 として換算した場合の数字である。

表 9 母語場面に現れた展開パターン

	1 回		2 回		3 回	
	KJ	J	KJ	J	KJ	J
自己開示一方型	5(27.8%)	10(66.7%)	7(38.9%)	5(50%)	4(33.3%)	7(70%)
質問一方型	4(22.2%)	4(26.7%)	4(22.2%)	1(10%)	2(16.7%)	2(20%)
自己開示双方型	3(16.7%)	1(6.7%)	3(16.7%)	2(20%)	4(33.3%)	0(0%)
混合型I	1(5.5%)	0(0%)	2(11.1%)	2(20%)	0(0%)	0(0%)
混合型II	3(16.7%)	0(0%)	1(5.5%)	0(0%)	2(16.7%)	1(10%)
その他 <sup>3</sup>	2(11.1%)	/	1(5.5%)	/	0(0%)	/

表 10 接触場面に現れた展開パターン

	1 回	2 回	3 回
--	-----	-----	-----

<sup>3</sup> その他は KJ だけに現れたパターンである。詳しい構造は 4.3.3 で示す。

	KJ1、J1	KJ2、J2	KJ1、J1	KJ2、J2	KJ1、J1	KJ2、J2
自己開示 一方型	9(60%)	8(57.14%)	7(46.7%)	5(35.7%)	7(50%)	6(42.9%)
質問 一方型	3(20%)	3(21.42%)	5(33.3%)	4(28.6%)	2(14.3%)	3(21.4%)
自己開示 双方型	2(13.3%)	2(14.4%)	2(13.3%)	2(14.3%)	3(21.4%)	3(21.4%)
混合型I	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(14.3%)	1(7.1%)	1(7.1%)
混合型II	1(6.7%)	1(7.14%)	1(6.7%)	1(7.1%)	1(7.1%)	1(7.1%)

まず、母語場面と接触場面の総合的使用率を見るとどちらの場面でも「自己開示一方型」が最も多く使用されている。大谷(2015)では、日本語母語話者は *interactive style* つまり、本研究での「質問一方型」を多く使用すると指摘している。しかしながら、本研究では自己開示を一方的にする語りのようなモノログ(大谷 2015)がもっとも多く、KJ と J のどちらも多く使う結果であった。特に、J の母語場面は KJ に比べ 1 回目から 3 回目の会話全てで 3 倍近く使用していることが分かる。そして、1 回目は 3 つのパターンだったのが 2 回目になって 4 つのパターンを使用し 3 回目にはまた 3 つのパターンになっていて、その割合を見ると「自己開示一方型」に偏っていることが分かる。一方 KJ の母語場面は展開するパターンも多く、パターンも多様に使用している。そして、1 回目、2 回目の会話にかけてすべての項目を使用するが、3 回目になると 4 つのパターンだけで話題を展開している。

次に、接触場面でのパターンは、母語場面と同じく「自己開示一方型」が多く現れている。2 番目に多く現れる「質問一方型」は、1 回目には 2 つのグループどちらも差が多く 2 回目の会話ではその差が少なくなり、3 回目の会話でまたその使用頻度差が顕著になる。

「自己開示双方型」は初回の会話から 3 回目までどちらのグループも変化はあまりなく使われている。「混合型I」は、2 回目から KJ2 と J2 のグループに現れ 3 回目にはどちらのグループにも見られる。「混合型II」は、母語場面で J の 3 回目の会話だけに現れていたが、接触場面では 2 つのグループのすべての会話に現れている。KJ と J の母語場面での特徴は、接触場面では現れないことが分かった。

#### 4.3.3 KJ に現れたパターン

KJ の母語場面では、1 回目の会話と 2 回目の会話に KJ だけに現れたパターンがあった。5 つのパターン以外のパターンであり、その他と命名した。その他の中には 2 つのパターンが現れ、1 つは「自己開示双方型」と「自己開示一方型」が混合していて、2 つ目は質問と自己開示を交互にやり取りをしているパターンであった。以下に実際の会話例を示す。日本語は筆者が翻訳した。

会話 1. 自己開示双方型+自己開示一方型

- 01 KJ1 : 아, 저 주제는 뭐세요 ? あ、テーマは何ですか? →話題導入質問
- 02 KJ2 : 저는 한어 동사 할려고 私は漢語動詞をしようと →自己開示
- 03 KJ1 : 아, 돌리셔야되네 돌리셔야되네 あ、回すやつですね h h →自己開示
- 04 KJ2 : 저는 그게 잘 못하는데 私あんまり知らない →自己開示
- 05 KJ1 : 딱 이 듣는 순간 스물스물 냄새가 聞いた瞬間そうなる気が
- 06 KJ2 : 저근데 저는 코파스를 몰라가지고 私あんまりコーパス知らなくて →自己開示
- 07 KJ1 : 요즘 핫한 학문인데 最近流行ってるのに →自己開示
- 08 KJ2 : 아、 あ、
- 09 KJ1 : 제가 할땐 유행을 안탔어요 지금 유행 엄청 타더라고요  
私がやってた時はあんまり流行ってなかったのに今はやってるらしいですね。 →自己開示
- 10 KJ2 : 예예 저도 석사 할때는 안썼거든요 코파스를 안쓰고 했는데  
はいはい。私も修士の時はやってなかったです。コーパス使ってなかったのに →自己開示
- 11 KJ1 : 아、 あ、
- 12 KJ2 : 여기서는 다들 쓰는 분위기?여가지고ここではみんな使ってる雰囲気?なので →自己開示
- 13 KJ1 : 맞아요 저는 한번 써보고 너무 힘들어서  
そうですね。私は一回使ってとても大変で →自己開示
- 14 KJ2 : 예 힘들더라고요 은근 はい。そうでした意外と大変でした。 →自己開示<sup>4</sup>
- 15 KJ1 : 그 막노동이잖아요 그게 너무 하기 싫어서 옮겼어요  
荒仕事じゃないですか、それが嫌で移りました。 h h →自己開示
- 16 KJ2 : 아 진짜요? あ、本当ですか?
- 17 KJ1 : 아니 그게 메인은 아닌데 어찌다 보니 저희 교수님 쪽으로 갔더니 그쪽에서는 그걸  
작업을 안하더라고요  
いや、それがメインではなかったんだけど、どういうわけか私の先生の方ではそれを使って  
作業しないんですよ。 →自己開示

会話例 1 では、話題導入の質問から始まり、15 行目まで KJ1 と KJ2 がコーパスについて交互に自己開示をしあう。そして、15 行目で KJ1 が「それが嫌で移りました。」と、さらにコーパスに関する経験について語り、16 行目で KJ2 がそれについて聞く。その後 17 行目からは KJ1 の自己開示が一方的に続く「自己開示一方型」で話題が存続されている。「自己開示双方型」と「自己開示一方型」は J にも表れるパターンである。しかし、会話 1 のように「自己開示双方型」が「自己開示一方型」に変わり話題が存続される例は今回 J には見られなかった。「自己開示双方型」は話題に関する自己の情報を言い合う構造で、話

<sup>4</sup> 自己開示双方型から自己開示一方型に変わる。

題になってから互いに話題を進行させようとすると考えられる。そのパターンから一方がさらに深く開示しようとし「自己開示一方型」に変わって行く構造だと考えられる。次に、「混合型II」の会話例である。

#### 会話 2 質問と自己開示相互型

- 01 KJ1 : 아 、 어디서 하셨어요 ? あ、どこでやりました? →話題導入質問
- 02 KJ2 : 저는 외대 私は<>大学 → 自己開示
- 03 KJ1 : 아 그러셨구나 、 여기 다들 외대 아니면 한국  
 そうだったんだ ここってほとんど<>大学もしくは<> →自己開示
- 04 KJ2 : 어디서 하셨어요 ? どこでやりました? →質問
- 05 KJ1 : 저는 고대요 私は < >大学 →自己開示
- 06 KJ2 : 아、 あ、
- 07 KJ1 : 이게 보면 외대아니면 고대에서 오시//더라고요 ㅃ 대학 물어보면 전부다 출신이 외대  
 아니면 고대 출신 분들이죠  
 h hなんか< >大じゃなかったら< >大からくるんですね。ほかの大学も聞いてみたらほ  
 とんど出身が< >大学じゃなかったら< >大学ですよ →自己開示
- 08 KJ2 : 음 주변에도 고대 분들 아는 분 있어요?  
 うん、回りにも< >大の知り合いますか? → 質問
- 09 KJ1 : 네 있어요 はい、います。 →自己開示
- 10 KJ2 : 아는 분들 있으세요?知り合いますか? →質問
- 11 KJ1:네 はい。

会話 2 は、相互に質問と自己開示をして話題を進行させている。KJ1 が出身の大学について質問し始め、出身大学の知り合いがいるか互いに質問をしている。深田(1998)によれば、相手からの自己開示は、受け手にとって社会的報酬の意味を持ち、受け手はもらった自己開示と同等の自己開示を開示者に対して返さなければならないと指摘している。J の会話でも「混合型II」のように自己開示一方型で片方が話題を進行させ、相手話者の開示が終わると片方の話者も同じように同程度の開示をし始めるパターンは出現している。しかし、KJ の会話に現れたように、質問と自己開示を互いにしつつ進めるのは見られなかった。

### 5 考察

本研究は、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話題の導入と展開に焦点を当て分析した。その結果、KJ と J の話題導入に現れる自己開示と質問の仕方、場面<sup>5</sup>による話題の内容と、話題の展開方法に相違点及び類似点があり、3 回の会話を重ねることで変化が見ら

<sup>5</sup> 本研究での場面は、接触場面及び母語場面を示す。

れた。まず、話題導入に現れる自己開示と質問は、KJ では導入するために多く現れ、J では話題を存続していくため現れている。奥山(2005)では、韓国語母語話者はごく早い段階で質問による話題導入を駆使し、相手に関する情報をできるだけ多く入れ、その後は話題をじっくりと絞りこみ深めて行き、日本語母語話者は安定した話題導入を意識しながら会話を遂行していると指摘している。本研究の結果でも、KJ は話題展開のために導入の時自己開示と質問が多く現れるが、会話の回を重ねることによって話題を派生させるため自己開示と質問が増え 1 つの話題を長く保ち、J は初回から導入時より話題を派生させる時自己開示と質問が多く現れることから、奥山(2005)を裏付ける結果であった。そして、会話の回数を重ねることで、KJ の話題導入の質問は 3 回目急激に減り 2 回からは話題導入質問と派生質問の差は見られなかったことから、韓国人は質問好きと(任・井出 2004)指摘されてきたが初対面での会話の特徴だと考えられる。一方、J も会話の回数を重ねることによって話題導入の質問が減少していくが、KJ のように急激に減ることはなく、徐々に減って行くことから J は初対面の会話から関係形成の過程において徐々に進展させていくことが考えられる。しかし、KJ が初対面の場面から相手と親密になるため距離を保たず接しようとする相手には負担になることが考えられる。一方、KJ は徐々に会話を進展させていく相手に対しては期待している反応と異なり間柄の進展をしたくないと誤解を招くことになる。

次に、話題の内容は初回目に KJ の方が J より 2 倍多く現れるが、会話の回数を重ねることで徐々に減る様子がうかがえた。そして、1 つの話題が存続して長くなる話題数が KJ は徐々に増えていくが、J は 1 回目の会話から存続する話題が多く現れていた。KJ は、初対面の相手でも相手と親密になるため、話題導入で質問を多くし情報を集め話題も多く現れたと考えられる。しかし、KJ も会話の回数を重ねることで J のように 1 つの話題を長く存続させていた。このように、KJ の特徴から J は初対面から情報を多く要求し話題をよく変えようとする KJ に対し違和感を抱き、負担を感じる可能性が考えられる。話題の種類においても、韓国語母語話者と日本語母語話者の母語場面を比較した三牧(1999)の指摘のように、KJ と J の話題の内容には共通している話題が多かった。しかし、接触場面では、母語場面で現れなかった話題が顕著に見え、話題の出現数も会話の回数を重ねることで減少せず、母語場面より多様であった。接触場面は、母語場面と異なって異文化の人との共通の話題を探すためだと推察される。

最後、話題展開のパターンは、従来見えづらかった展開のパターンを自己開示と質問の連鎖からそのパターンを再分類化した。まず、共通に現れたパターンと KJ にだけ現れたパターンがある。先行研究でも見られたように、interactive style、duet(大谷 2015)本研究では、「質問一方型」、「自己開示一方型」で、協調的役割交替型(楊 2015)本研究では、自己開示競争型が現れた。そして、さらに「質問一方型」と「自己開示一方型」の「混合型I」と「自己開示一方型」と「自己開示一方型」の「混合型II」が見られた。KJ だけに現れたパターンは、質問と自己開示を交互にし合い相手に同程度の情報も求める質問と「自己開示相互型」が見られ、互いに自己開示をしあいその後片方の話者が「自己開示一方型」にな

り、さらに深く開示し始める「自己開示双方型+自己開示一方型」であった。KJ の会話に現れたパターンは、相手と親密になるため深い自己開示をし、同程度の開示をする(深田 1998)ことから、初対面の会話から急速に相手との距離を進展させようとして現れたパターンだと考えられる。しかし、J のパターンからも「混合型II」のように相手が「自己開示一方型」で開示をして片方の相手も同程度の開示を「自己開示一方型」ですが、相手話者との対話的スタイル<sup>6</sup>(申 2006)を重視する KJ とは異なって、初対面からの会話からは現れなかったと考えられる。相手と親密になろうとすることは、同文化の人でも異文化の人でも同じであるが、KJ と J は初対面の場面からその意思を表す方法が異なる。そして、会話に現れる話題をどのように変えるか、存続させていく方法が異なっていた。互いに関係形成の仕方は異なるが、親密になろうとしていることは共通していて、その差は、初対面の場面で顕著に表れることが考えられる。

以上の結果から、KJ と J に見られる共通点及び相違点が明らかになった。そして、母語場面と接触場面では相互の働きが違うことが明らかになった。最後、3 回の会話を通し、より初対面での特徴が見えたといえよう。次節は、本研究のまとめと今後の課題について述べる。

## 6 まとめと今後の課題

本研究は、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の母語場面及び接触場面から話題導入と内容、話題展開パターンを明らかにした。主な結果をまとめると次のようになる。

自己開示と質問を KJ は話題導入時、つまり話題を展開するため多く使い、J は話題になってからその話題をさらに派生させるために多く使うという違いがあった。話題の内容は、J は初対面から徐々に進展していくため、1 つ話題について初対面の場面から長くなる特徴が見られたが、KJ は初対面の時から相手の情報を多く収集しようとし、話題の種類も多く話題の展開が早いことが明らかになった。しかし、接触場面では、母語場面に出現した話題が同様に出るが、互いの共通点を探するため母語場面では出現しない話題の内容を取り上げようとするのが推察された。話題を展開する際、KJ のパターンは初対面の場面から相手の情報を集めるため全てのパターンを使っており、J はパターンの使用種類が徐々に少なくなるとともに、3 回目には展開パターンが 1 つに絞られ出現していた。このように KJ は、会話を急速に進行させることが考えられ、一方、J は安定的な進行をすることが考えられる。KJ と J は、情報を集めて話題を進行させる仕方が違うことが明らかになった。

本研究で明らかになったように、KJ と J の母語場面は異なり、さらに接触場面と母語場面では異なる構築方が見られた。そして、3 回の会話を通して変化していくことが見えたことから初対面場面だけの特徴も明らかにできたと考えられる。異文化の相手の会話をす際、このような違いを把握し、理解しておくことが必要であり会話を相互に構築してい

<sup>6</sup> 申 (2006) では、韓国語母語話者は相手に直接情報を引き出し、それについての自分の考え方をはっきり表現しながら積極的に談話展開に参加すると指摘している。

くことが重要だと考えられる。

本研究では、話題に現れる自己開示に注目し、話題導入と派生させる仕方、展開パターンの分析を切り口に、母語場面と接触場面における KJ と J の共通点及び相違点を明らかにしたが、今後、データを増やし量的調査でさらに検証をしていく必要があると考える。そして、実際の会話データのみならず、意識面も検討し質問紙調査の研究を進めていくことが望まれる。

### 参考文献

- 井出里沙子・任榮哲 (2004) 「箸とチョッカラー言葉と文化の日韓比較」大修館書店。
- 宇佐美まゆみ・前田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2: 130-145.
- 榎本博明 (1997) 「自己開示の心理学的研究」北大路書房。
- 奥山洋子 (2005) 「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話—質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に—」『社会言語科学』8: 69-81.
- 大谷麻美 (2015) 「話題展開スタイル日・英対照分析—会話参加者はどのように話題の展開に貢献するのか—」『日・英語談話スタイルの対照研究: 英語コミュニケーション教育への応用』津田早苗他(編), 193-229.
- 河内彩香 (2003) 「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』41-55.
- 河内彩香 (2009) 「日本語の雑談における話題の展開方法」『東京大学留学生センター教育研究論集』15: 41-58.
- 熊本智子・石井恵理子 (2005) 「会話における話題の選択—若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から—」『社会言語科学』8: 93-105.
- 熊谷智子・石井恵理子 (2008) 「会話における話題選択の日韓比較」『対人行動の日韓対照研究言語行動の基底にあるもの』尾崎喜光(編) ひつじ書店, 197-239.
- 小川一美 (2000) 「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者及び会話に対する印象の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』47: 173-183, 心理発達科学.
- 申媛善 (2006) 「情報のやりとりにおける受信者側の働き—日本語話者と韓国語話者の比較—」『筑波応用言語学研究』13: 85-97.
- 全鍾美 (2010) 「初対面相手に対する自己開示の日韓対照研究—内容の分類から見る自己開示の特徴—」『社会言語科学』123-135.
- 田所希佳子 (2013) 「初対面会話教育における重要項目の選定に関する考察—母語話者・非母語話者に対する意識調査から—」『早稲田日本語研究』22: 13-23, 早稲田大学日本語学会.
- 内藤伊都子 (2011) 「親密さの要因としての対人魅力、自己開示及び非言語行動—同性二者間による日本人の友人と異文化の友人の比較—」『ヒューマンコミュニケーション研究』39: 5-24.

- 中井陽子 (2002) 「初対面母語話者/日母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現とか字和野理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに」『群馬大学留学生センター論集』 23-38.
- 中井陽子 (2003a) 「初対面日本語会話の話題開始部/終了部で用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語教育センター紀要』 16: 71-95.
- 中井陽子 (2003b) 「話題開始部で用いられる質問表現—日本語母語話者同士及び母語話者/非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』 02: 37-54.
- 中井陽子 (2004) 「話題開始部/終了部で用いられる言語的要素—母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合—」『講座日本語教育』 40: 3-26.
- 中川晶子 (2003) 「親しさのコミュニケーション」くろしお.
- 花村博司 (2015) 「日本語会話における話題転換表現—新出型・再開型・前提提示型という話題転換の形による使い分け」『社会言語科学』 18: 75-92.
- 深田博己 (1998) 「自己を知らせるコミュニケーション：自己開示」『インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学』 82-103, 北大路書房.
- 三牧陽子 (2008) 「敬語とコミュニケーションの現在——話題の選択と展開に見るポライトネスディスコースレベルから捉えた相互行為」『文学』 32-42, 岩波書店.
- 三牧陽子 (2013) 「話題の選択と転換に見るポライトネス」『ポライトネスの談話分析』 231-268, くろしお出版.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』 62: 101-111.
- メイナード、泉子・K (1993) 「会話分析」くろしお出版.
- 李善玉 (2016) 「韓日異性間の初対面会話の話題に関する研究—話題提示方法と話題導入要素を中心に」『日本語教育国際研究大会予稿集』
- 陽虹 (2006) 「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』 8: 327-336.
- 陽虹 (2007) 「中日母語場面の話題転換の比較—話題終了のプロセスに着目して—」『世界の日本語教育』 17: 37-52.
- 陽虹 (2011) 「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較—参加者間の相互行為に注目して—」『立命館言語文化研究』 22: 185-201.
- 陽虹 (2015) 「初対面会話における話題上の聞き手行動の日中比較」『日本語教育』 162: 66-81.
- Nakayama, Akiko (2008) *The communication of closeness in Japanese*. Kurosio: Publishers.  
(吳暉榮 筑波大学大学院生)

#### <記号凡例>

- 、 発話と発話の間に短い間がある場合につける。
- 。 1 発話文の終わりにつける。
- ? 疑問文につける。

hh

< > 固有名詞など、会話参加者のプライバシー保護のために明記できない単語を表す時に用いる。

# Self-disclosure in topic development: Based on the conversation from the first meeting to the third time conducted between Japanese native speaker and Korean Japanese learner

OH Hyunyoung

In the research, in order to capture the change in the process from the beginning of the relationship formation, three times based on the conversation data (1) Introduction of topics way (2) Types of topics and contents of self-disclosure (3) Examined the structural changes of each topic. As a result, KJ have many self-disclosure and questions for introduction of topics, J have self-disclosure and questions to persist the topic. The type of topic is that the first conversation of KJ is twice as many as J, and the second conversation suddenly decreases. In KJ, while the topic does not long in the first conversation, J have a long topic from the first conversation. KJ's topic development pattern is diverse, and there are only patterns that appear in KJ. In the third conversation, both KJ and J had fewer patterns, and that the emerging patterns are also common.